

2026年度 随時応募枠共同利用研究報告書

2026年09月24日

所属・職名 アジア・オセアニア研究教育機構・准教授
里村和歌子

		整理番号		2026c002	
1.研究計画題目	ラオス女子教育停滞のメカニズム解明に向けた研究設計 ―混合研究法と産業・数理の統合的アプローチ				
2.新規・継続	新規				
3.種別	随時募集枠				
4.種目	研究集会（Ⅱ）				
5.開催方法	ハイブリッド開催				
6.研究代表者	氏名	里村和歌子			
	所属 部局名	アジア・オセアニア研究教育機構	職名	准教授	
7.研究実施期間	2026年08月24日(月曜日)～2026年08月25日(火曜日)				
8.キーワード	混合研究法、統計数理、女子教育、ラオス、ジェンダー				
9.参加者人数	20人				

10.本研究で得られた成果の概要

本研究集会は、コロナ禍後に女子の大学進学率が低下したまま回復していないラオスの状況について、その要因を実証的に特定する研究プロジェクトのキックオフとして企画したものである。女子の学業継続を阻む要因は単一の視点では全体像をとらえられないため、個人や家族の意識の変化（質的・量的などの社会調査）、構造的変数の測定・検証（統計数理）、若年労働市場の実態（産業界）という三層の異なる立場の参加者が同じテーブルにつき、「なぜ女子は学業を続けられないのか」という問いを、数理的に測定可能な変数として共同で定式化することを最終目的とした。当日は、量的調査、統計数理、質的調査という三つの方法論と、各登壇者がこれまで進めてきた研究の紹介が中心となった。これは、提案時に掲げた、「共通目的を共有する異分野の参画者がそれぞれの専門領域を紹介し、今後の研究計画の具体化に寄与する」という段階に対応するものであり、異なる分野の参加者が互いの前提と語彙を共有するという所期の目的は果たされた。

そのうえで最大の成果と考えているのは、パクセー・ジャパン経済特区社長の望月氏より、ラオスの基礎的な状況、パクセー・ジャパン経済特区の実際、および若年層の労働状況について、現地からの報告を直接うかがえたことである。ここから、それぞれの方法論を、現実のどこにどう突き合わせていくのかという手がかりを得た。提案時に企図した社会科学の実課題を数理系の研究者や学生に提示し、数理系の研究者が数理的に解釈を試みるという双方向性が、抽象的な課題設定ではなく、現地の具体的な状況を伴う形で成立した点に大きな意義があった。

同時に、本集会が文字どおりのキックオフであり、調査を始めるにあたり課題が具体的に見えたことも大きな成果であったと考えている。題目に掲げた「女子教育の停滞」にしても、「停滞」を調査によってどのようにとらえるのかは自明ではない。この認識を登壇者・参加者のあいだで共有できたことが、次の段階に進むための基礎になると考えている。

今後は、「停滞」をどの指標で測るのかという変数の設定から議論を積み上げ、現地の実態と方法論を突き合わせながら調査設計を具体化していきたい。数理科学と社会科学の融合による研究の新展開が期待される段階にあり、本枠組みを継続する意義は高いと考えられる。

ラオス女子教育停滞のメカニズム解明に向けた研究設計
——混合研究法と産業・数理の統合的アプローチ

Research Design for Elucidating the Mechanisms of Stagnating Girls' Education in Laos: An Integrated Approach
Combining Mixed Methods, Industry, and Mathematical Sciences | 2026c002

研究代表者 里村 和歌子
九州大学 アジア・オセアニア研究教育機構
准教授

1. 開催概要

本共同利用研究は、2026 年 8 月 24 日（月）の非公開セッションと、8 月 25 日（火）に九州大学伊都キャンパス ウェスト 1 号館 D 棟 コンファレンスルーム（W1-D-414）で開催した公開シンポジウム（ハイブリッド形式）によって推進された。公開シンポジウムは、開会・趣旨説明、5 件の報告から構成されており、報告者と報告内容は以下の通りであった。

報告者	所属	報告タイトル
非公開セッション		研究報告、公開シンポジウムに向けた論点整理 （8 月 24 日 JR 博多シティ九州大学オフィス会議室）
甲斐 敏洋 里村 和歌子	福岡ラオス友好協会 九州大学 アジア・オセアニア研究教育機構	開会・趣旨説明
望月 敏洋	株式会社 西松建設 ラオス パクセー・ジャパン経済特区	ラオスの経済特区と若年労働市場
加藤 直子	桜美林大学 グローバル・コミュニケーション学群	量的調査設計の原則と課題
廣瀬 雅代	九州大学 マス・フォア・インダストリ研究所	統計数理的観点からの社会調査への貢献可能性
徳安 祐子	九州大学 アジア・オセアニア研究教育機構	[質的調査に基づく研究報告①] 日常に巻き込まれる——ラオスでの調査から
味志 優	九州大学 アジア・オセアニア研究教育機構	[質的調査に基づく研究報告②] 見えない行為、聞きにくい話をどう調査するか——タンザニア農村でのフィールドワークから

公開シンポジウムでの参加者（オンライン含む）は 21 名であった。本研究集会は、コロナ禍後に女子の大学進学率が低下したまま回復していないラオスの状況について、その要因を実証的に特定する研究プロジェクトのキックオフとして企画したものである。女子の学業継続を阻む要因は単一の視点では全体像をとらえられないため、個人や家族の意識の変化（質的・量的などの社会調査）、構造的変数の測定・検証（統計数理）、若年労働市場の実態（産業界）という三層の異なる立場の参加者が同じテーブルにつき、「なぜ女子は学業を続けられないのか」という問いを、数理的に測定可能な変数として共同で定式化することを最終目的とした。

2. 研究集会の内容

本研究集会は、共通の目的を共有する異分野の参画者がそれぞれの専門領域を紹介し、今後の研究計画の具体化に寄与することを企図したものである。討議の中心となった三つの論点について、以下に概説する。

1) 現地の実態と方法論の突き合わせ

望月氏より、ラオスの基礎的な状況、パクセー・ジャパン経済特区の実際、および若年層の労働状況について、現地からの報告がなされた。進出企業における採用、定着の実態（欠勤・離職率の高さ、タイへの出稼ぎによる応募者減少等）、若年労働者の長所と課題、県単位のインフラ状況（人口や電化率等）や職業訓練校の事例が具体的に示された。教育需要が労働市場の姿によって規定されるという「出口」側の視点として整理できる内容であった。

2) 質的知見・量的設計・統計数理の接続

つづいて加藤氏からは、社会調査の設計原則とこれまでの調査研究の経験を踏まえ、従属変数の選定、標本設計、設問の操作化において実際に生じる問題が紹介された。廣瀬氏からは、小地域推定（EBLUP など、実質的には混合効果モデルに基づく手法）を中心に、これまでの社会調査データに適用した解析事例の紹介が行われた。標本の小さい地域単位についても補助情報を用いることで推定精度を確保しうる可能性が示され、ラオスにおいて多くの地域におけるデータが得られた場合、当該手法の応用可能性を示唆する内容であった。味志氏・徳安氏からは、女子教育そのものについての現地調査結果ではなく、それぞれが携わってきた現地調査の経験に基づき、質的調査の方法論が報告された。味志氏は、タンザニア農村での調査（選挙時の票の買収）を題材に、聞きにくい事柄を調査する際の工夫として、時間をかけた信頼関係の構築や、調査者側の枠組みを持ち込まない問いの立て方の重要性を指摘し、ラオスの調査における問いの立て方への示唆にも触れた。徳安氏は、長期滞在型の参与観察によって初めて見えてくる文脈理解の重要性を、自身のラオス（サワンナケート県）でのフィールドワーク経験から共有した。四者の報告を並べると、県や郡といった細かい単位に降りたときの標本の限界、および聞き取りで見えている構造をどのように設問や変数の形に落とすかという課題が見えた。

3) 「停滞」をどのように測るか

時間の都合上全体討論の時間が確保できなかったが、閉会後に論点となったのは、本研究集会の題目に掲げた「停滞」を、調査においてどのようにとらえるのかという問題である。就学率、修了率、就労を始める年齢などのいずれを最終的な停滞を測る変数に置くかによって、必要なデータも使用可能な手法も変わる。この点について結論には至らず、指標の選定から一つひとつ議論を重ねて決めていく必要があることが確認された。この問いは、社会科学と数理系の双方に向けて提示される具体的な課題の第一号でもあり、提案時に掲げた「社会科学のみでは解決困難な新たな数理的課題の探索」の出発点にあたると考えている。

3. 今後の発展と展望

本研究集会は、異なる分野の参加者が互いの前提と語彙を共有するという所期の目的を果たすことができた。同時に、本集会が文字どおりのキックオフであり、始めるにあたり課題が具体的に見えたことも大き

な成果であったと考えている。上述のとおり、題目に掲げた「女子教育の停滞」にしても、「停滞」を調査によってどのようにとらえるのかは自明ではない。この認識を登壇者・参加者のあいだで共有できたことが、次の段階に進むための基礎になると考えている。

あわせて、大学、産業界、市民社会（福岡ラオス友好協会）にまたがる学際的ネットワークの萌芽的な形成という当初の目的も達成された。8月25日夕には地域の中小企業関係者を交えた意見交換の場を設け、ラオスの社会課題と地域産業の接点について議論を継続している。

今後は、「停滞」をどの指標で測るのかという変数の設定から議論を積み上げ、現地の実態と方法論とを突き合わせながら調査設計を具体化していく。数理科学と社会科学の融合による研究の新展開が期待される段階にあり、本枠組みを継続する意義は高いと考えられる。

謝辞

本研究は九州大学マス・フォア・インダストリ研究所 共同利用・共同研究拠点の支援を受けた。（2026年度 研究集会（Ⅱ）「ラオス女子教育停滞のメカニズム解明に向けた研究設計——混合研究法と産業・数理の統合的アプローチ」（2026c002））

また、本研究集会は公益財団法人稲盛財団はぐくむの助成、ならびに福岡ラオス友好協会および九州大学アジア・オセアニア研究教育機構（Q-AOS）の共催を得て実施された。



開催日:2026/08/24~2026/08/25

ラオス女子教育停滞のメカニズム解明に向けた研究設計 ——混合研究法と産業・数理の統合的アプローチ | 2026c002

カテゴリー:イベント

タグ:

随時募集

研究集会II

開催概要

- 開催方法:ハイブリッド開催
- 開催場所:九州大学 伊都キャンパス ウェスト1号館 D棟 4階 IMIカンファレンスルーム (W1-D-414)
- 主要言語:日本語
- 共催:九州大学マス・フォア・インダストリ研究所 (IMI)、福岡ラオス友好協会 <https://fukuoka-laos.org>、九州大学アジア・オセアニア研究教育機構 (Q-AOS)
- 種別・種目:随時募集枠-研究集会 (II)
- 研究計画題目:ラオス女子教育停滞のメカニズム解明に向けた研究設計 ——混合研究法と産業・数理の統合的アプローチ
- 研究代表者:里村 和歌子 (九州大学アジア・オセアニア研究教育機構・准教授)
- 研究実施間:2026年8月24日 (月) ~2026年8月25日 (火)
- 公開期間:2026年8月25日 (火)
- 研究計画詳細:https://joint2.imi.kyushu-u.ac.jp/research_chooses/view/2026c002

プログラム

8月24日 (月)【非公開】15:00-18:00

8月25日 (火)【公開】14:00-16:30

14:00

開会・趣旨説明

甲斐敏洋氏 (福岡ラオス友好協会理事・事務局長)

里村和歌子准教授 (九州大学アジア・オセアニア研究教育機構)

14:10

ラオスの経済特区と若年労働市場

望月敏洋氏 (西松建設・ラオスパクセージャパン経済特区商務部長・共同社長)

15:10

量的調査設計の原則と課題

加藤直子准教授 (桜美林大学グローバル・コミュニケーション学群)

15:25

統計数理的観点からの社会調査への貢献可能性

廣瀬雅代准教授 (九州大学マス・フォア・インダストリ研究所)

15:40

質的調査に基づく研究報告

味志優助教・徳安祐子学術研究員 (九州大学アジア・オセアニア研究教育機構)

16:00

全体討論

16:30

閉会

申込方法

事前申込制（組織委員，講演者のかたも登録が必要です）

参加無料

定員になり次第，参加登録を締め切らせていただく場合がございます。

＼下記URLより参加登録をお願いいたします／

[参加登録フォーム](#)

Zoom（オンライン）からご参加の方

Zoomを使ったオンライン開催，ハイブリッド開催の場合

参加登録後に件名「九大IMIより」Zoom用URLのお知らせというメールがimikyoten@gmail.comから自動配信されます。

届いていない方は，お手数をおかけしますがもう一度ご登録いただくか下記にメールにてご連絡をお願い申し上げます。

（迷惑メールフォルダもご確認お願いいたします）

＜九州大学マス・フォア・インダストリ研究所 共同利用・共同研究拠点事務局＞

imikyoten(at)jimu.kyushu-u.ac.jp

(at)を@に変更してください

Zoomについて

開催日までにZoomアプリをインストールしてください。

Zoomアプリは無料版で問題なくご視聴いただけます。

ミーティング用Zoomクライアントのダウンロードは下記からお願いします。

すでにインストールされている方は最新版にアップデートをお願いいたします。

https://zoom.us/download#client_4meeting

パソコンやスマホへのインストール方法は下記をご参照ください。

<https://zoom.nissho-ele.co.jp/blog/manual/zoom-install.html>

概要	運営	2026年度公募	アクセス・お問合せ
概要	運営委員会	採択研究・報告書一覧	学内専用（トップページ）
活動報告	共同利用・共同研究委員会	イベント情報	委員専用
	国際プロジェクト委員会	会場設備	研究代表者専用
		Q&A	メールマガジン